

## 比較社会文化研究院

I	研究の水準	.....	研究 12-2
II	質の向上度	.....	研究 12-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学際新分野を創出するための支援として、第2期中期目標期間（平成22年度から平成27年度）に「特色ある研究プロジェクト」、「特色ある研究支援プログラム」による研究院独自の助成を計39件実施しているほか、学際的な研究集会11件の開催を支援している。
- 平成22年度から平成26年度における研究発表数は平均143.4件となっており、このうち国際会議での発表数は44.4件、査読有の論文数は59.0件となっている。
- 平成22年度から平成26年度における科学研究費助成事業の採択状況は、平均38.8件（約7,160万円）となっている。また、受託研究の受入状況は平均4.0件（約1,080万円）となっている。
- 考古学分野の研究に貢献するため、考古学資料の分析手法の開発、展示技術の開発・改良、発掘技術の開発・改良等の取組を実施している。また、国立科学博物館において展示物の監修・解説を担当している。

以上の状況等及び比較社会文化研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

〔判定〕 期待される水準を上回る

〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、学際新分野を創出する研究を推進しており、特に中国文学、考古学において卓越した研究成果がある。
- 卓越した研究業績として、中国文学の「中国宋代の偉人・歐陽脩の書簡96篇の発見」、考古学の「日本列島における国家形成過程の研究」及び「考古学資料に対する高精度地球科学的分析の実践研究」がある。考古学の「考古学資料に対する高精度地球科学的分析の実践研究」は、青銅器研究の範囲を生産段階にまで幅を広げ、従来の研究で注目されていた金属原材料だけでなく、鑄型そ

のものの原材料が特定の原産地から運び込まれ、その素材の入手と確保が青銅器生産を行うためには必要であったことを明らかにし、アジア鑄造技術史学会奨励賞を受賞している。

- 社会、経済、文化面では、現代的諸問題の解決に向けた研究を推進しており、特に地質学において特徴的な研究成果がある。
- 特徴的な研究業績として、地質学の「フィールドワークと最先端機器分析の融合に基づく南極大陸の形成過程の研究」があり、超大陸の形成過程を明らかにするため、南極大陸での岩石採取を含むフィールドワークから研究室での最先端分析装置群を用いた室内実験を一環として実施し、精密な地質形成史を解明している。

以上の状況等及び比較社会文化研究院の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、比較社会文化研究院の専任教員数は46名、提出された研究業績数は10件となっている。

学術面では、提出された研究業績10件（延べ20件）について判定した結果、「SS」は4割、「S」は4割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績2件（延べ4件）について判定した結果、「S」は10割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1件の研究業績に対して2名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 改善、向上している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間における査読有の論文数は平均 59 件となっており、英語等の外国語で執筆された原著論文の割合は、平均 46.5%となっている。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 国内外の学会等からの受賞数は、第1期中期目標期間（平成 16 年度から平成 21 年度）の計 5 件から第2期中期目標期間の計 16 件へ増加しており、このうち英語で書かれた論文・著書による受賞件数は 2 件から 4 件へ増加している。
- 考古学の「日本列島における国家形成過程の研究」及び「考古学資料に対する高精度地球科学的分析の実践研究」は、それぞれ日本考古学協会賞大賞を受賞している。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。